

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第46号

● 目次 ●

| | |
|---------------------------------------|-----|
| 論点：日露学長会議（第2回）がモスクワで開催 | 1 |
| 東北アジア通信：ノボシビルスクの若者達—ノボシビルスクと日本の協力の可能性 | 2~3 |
| 会員の広場：東北大学オープンキャンパス（7/28～29）に参加して | 4 |
| 編集後記 | 4 |



日露学長会議（第2回）がモスクワで開催

東北アジア研究センター 塩谷 昌史



2010年9月11日、日露学長会議（第2回）がモスクワ国立大学で開催された。筆者も、この会議に関わったので報告させていただく。

この日露学長会議は、昨年5月にプーチン首相が来日した際に合わせて、東京外国語大学の亀山郁夫学長とモスクワ国立大学のサドーブニチー学長が主催し、第1回の会議を東京で開催した。その際、次回の日露学長会議が、モスクワで開催されることが決定された。今回の会議の開催に当たり、日本側では東北大学と東京外国語大学が幹事を、ロシア側でロシア学長連盟と21世紀委員会が幹事を担った。午前10時から日露学長会議は始まり、東北大学の井上明久総長と、モスクワ大学国立大学のサドーブニチー学長が司会を務めた（写真1）。今回は、日本側から20大学、ロシア側から22大学が参加した。参加者総数は約200名であった。来賓として、鳩山邦夫・衆議院議員（日露協会会長）と、ルシコフ・モスクワ市長（21世紀委員会委員長）

が挨拶を行った。今回、東北大学は日露学長会議を運営するだけでなく、ロシア海外大学共同利用事務所の開所式も行う必要があった。この事務所の設置は、文部科学省が「グローバル30」のプログラムで進める事業の一環であり、日露の学術交流を促進する機能が、事務所に期待される。モスクワ大学物理学部の建物（写真2）の中にこの事務所は存在し、ロシア人女性のマスロヴァ・イリーナ氏が常時勤務している。開所式は当初、日露学長会議とは別に行う予定だったが、諸事情のため、開所式も日露学長会議の中で行うことになった。サドーブニチー学長と濱口道成総長（名古屋大学）が基調講演を行った後に、開所式が行われた。大勢の日露学長を前に、事務所の開所式を行うのは効果が大きかったように思われる。日露学長会議は無事に閉幕した。次回は2012年春に日本で開催される予定である。仙台も開催地候補に挙がっているため、第3回目の日露学長会議は東北大学で行われる可能性がある。



写真1 天井の高い大会議室で開催の日露学長会議；右サイド中央に立つサドーブニチー・モスクワ国立大学学長、手前にルシコフ・モスクワ市長（当時）、井上・東北大学総長、亀山・東京外国語大学学長



写真2 ロシア海外大学共同利用事務所が入っているモスクワ大学物理学部ビル入口で；左から北村副学長、井上総長、木島総長補佐。3枚のネームプレート、上から「モスクワ大学物理学部」>「ロシア海外大学共同利用事務所（東北大学運営）」>「東北大学ロシア代表事務所」

東北アジア通信

ーノボシビルスクの若者達ー ノボシビルスクと日本の協力の可能性

環日本海経済研究所 特別研究員
新潟県知事政策局国際ビジネス担当参与

前田 奉司



急に寒くなって、今日の秋の深まりを感じながら9月22日に30度の新潟を出発し、9月23日午前1時にハバロフスク経由でノボシビルスクに降り立ち、プラス5度の寒さに震え上がったノボシビルスクの鮮やかな思い出を以下に書いてみたい。

国際イノベーションフォーラム [INTER-2010]

ノボシビルスク州知事の招待で、本年9月23日-25日ノボシビルスクで開催された国際イノベーションフォーラム [INTER-2010] にパネラーとして参加した (写真1)。



写真1 [INTER-2010] 討論会でのパネラー；私の向かって右隣の人が Basiliy Yurchenko ノボシビルスク州知事、他はドイツ、フランスからの参加者

この会議はロシア連邦大統領経営者養成委員会卒業生連盟プログラムの一環 (写真2) として組織され、ノボシビルスク地方行政が支援して開催しているもので、行政府としてもこのフォーラムを若者の祭典として取り上げ、若者のイノベーションに対する意識を高めようという狙いもあり、全市を挙げた取り組みであった。ロシア連邦政府関係者、ロシア各地域の代表、海外から仏、独、英国、中国、韓国、日本等から学者、ビジネスマンが約1500人参加した。

今回は、ノボシビルスク地方知事より小職にパネラーとして参加してもらいたいとの依頼あったもの。日本からの参加は小職一人であった。

会議では、「通信分野における情報工学」、「ナノの世界から宇宙の星」、「生活環境」、「最新の科学の成果に基づいたシベリアの農業コンプレックスのイノベーションの進歩」等幅の広い分野の討議が行われた。

◇ ノボシビルスクとしての課題

ノボシビルスク州知事、シベリア管区全権代表 (前ノボ

シビルスク州知事) 等より、ノボシビルスクの置かれた状況、問題点が指摘された。

- ー テクノパーク構想があるがソ連時代に作られたアカデムゴロドクをどうするのかという問題提起がなされた。
- ー ソフト開発力は世界レベルにあるがそれを生かす国家ファンド、小口ファイナンスファンド、ベンチャーファンド等の不足
- ー 技術管理システムが不足しているために折角よい技術があっても役に立たない。
- ー 形式主義、官僚主義の弊害

◇ 日本とノボシビルスクとの経済協力の可能性

小職には、「新潟及び日本における海外からの投資誘致および観光誘致の経験、日本とノボシビルスクとの経済協力の可能性」について話してもらいたいとの事で、極東地域における日ロ間の地域間経済協力の事例を挙げ、欧州と極東ロシアの中心に位置するシベリア最大の都市ノボシビルスクと日本との協力の可能性につき話した。

35年間に亘る商社勤務の間、世界の20カ国近い国との様々なビジネスに関わってきたこと、ロシアに21年間駐在し、シベリア開発等のプロジェクトや鉄鋼、鉄鋼原料、建設機械、木材、食品、化学品、肥料、燃料などさまざまなビジネスに関わってきたこと、ソ連時代と現在のロシアとの相違につき触れた。日本センター所長時代にロシアの若手ビジネスマンの教育に携わり、現在、彼らが日ロ間の経済交流の大きな役割を果たしていることを説明した。

彼らに何度も繰り返し教育してきたことは、ソ連崩壊後のロシアで資本主義社会におけるビジネスの基本姿勢、日



写真2 ノボシビルスクの企業で活躍している会議参加者 (ロシア大統領経営者養成プログラム卒業生) と共に

東北アジア通信

本との経済交流の基本は、金をもうけることだけでなく「誠意に基づいた信頼関係の構築」にあり、これを実現するためにパートナー双方が何をなすべきかを考えるべきであると強調した。

これまで、この会議には、ヨーロッパからの参加が主体で、日本からの参加は今回の小職が初めてとの事で、日本に対して非常に高い関心が寄せられた。

ノボシビルスクとの間に直行便があるドイツ等とは非常に近い関係にあることが感じられ、日本に対して関心はあるものの一般には日本のことが殆ど知られていない事が分かった。

討論会では下記の可能性につき話し合った。

- 一 科学技術分野での交流の可能性：東北大学が既に基礎を築いておられることこれをさらに発展させること、ERINAとしてこの方向で協力できることがあれば協力する。この分野の橋渡しをできる若手人材の育成の必要性
- 一 ノボシビルスクと日本との経済交流のための問題点：ソ連時代と現在のロシアとのビジネス形態の相違を認識するべきであり、かつては国家が相手であったが、現在は日露の企業間で相互理解に基づく信頼関係構築が必須である事を強調した。
- 一 物流：ロシアの国土の広さが障害となっており、日本とノボシビルスクとの距離を如何にして克服するかがポイント
- 一 ハバロフスク、ウラジオストクの物流基地を活用することが効果的
- 一 通関、検疫システム：ロシアでは頻りに法律が変わること、地域によって法律の解釈が異なることが大きな弊害となっている。食品に関しては現地で検疫手続きを行える企業が必要
- 一 日本からの食品の輸入：日本の食文化、商品を熟知する極東のビジネスマンとの協力により日本の生産者と直結できる。ノボシビルスクでは一部の日本食品がモスクワ経由で持ってこられているが、極東経由で新鮮な日本食品を輸送可能なることを説明
- 一 ロシアからの食品の輸入：自然食品、穀物等の受け入れ
- 一 そのほか、木材加工、医療交流、観光、文化交流の分野における協力が可能なる旨を説明した。

上記会議の詳細については、後日、インターネットで公開される予定とのこと。

KUZUNETSOV 教授との面談

ちょうど同じ時期にノボシビルスクに滞在されていた東北大学東北アジア研究センター徳田由佳子様のご配慮により、東北大学との協力関係を築き窓口となっておられるロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所前所長KUZUNETSOV教授と面談した(写真3)。



写真3 東北大学シベリア連絡事務所にて、無機化学研究所前所長KUZUNETSOV教授(中)と、大統領経営者養成プログラム卒業生同窓会幹事のMr. Shibets Maxim氏(小職が設立した組織であるハバロフスク日本センター付属ビジネスマンクラブのリーダーで、今回ノボシビルスクから招待されハバロフスクから私と同行)、ならびに筆者

当方より今回のイノベーションフォーラムの状況を報告し、イノベーションによる新技術をビジネスに結びつけるためには、科学技術を理解する若手ビジネスマンを育成する必要がある事を指摘したのに対して、K教授より、今回のフォーラム[INTER-2010]開催に当たって事前に協力したこと、ノボシビルスクと日本との科学技術の交流発展のために日本政府が提唱しているGLOVAL30を活用し、若手人材を育成するべきであることを強調された。ロシアでは電力、エネルギーが豊富であった為、節約志向がなく電力を節約する技術が進んでいない由。

9月26日はノボシビルスク市挙げてのイベントで町中が交通規制され夕刻より遊歩道に変わった道路に町中の若者が繰り出し、野外音楽会やさまざまなイベントが夜遅くまで開催され、花火が打ち上げられ、町中がお祭り気分であった。我々会議参加者は市内のオペラ劇場での催しに招待された(写真4)。

これらすべての催しが若人の意気込みと将来を祝福するためのもので、地元行政府、学術関係者等の若人に対する期待がひしひしと感じられた3日間であった。これらの若人の活躍により日本とノボシビルスクの関係が発展することを祈りつつ筆を置く事とする。



写真4 [INTER-2010]行事の一環としてオペラ観劇などのイベントも組込まれ、全市を挙げての取り組みになっている。

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです（不定期）。
 今回は、この夏ご子息に付き添って、秋田県から本学のオープンキャンパスに参加された阿部克人様に一文をお願いしました。本懇話会事務局にも立寄られました。理系（鉱物）文系（歴史）共に深い関心を持ち、しかも剣道にも傾注しながらすくすくと大きく育っている文武両道の少年を見まして、日本の将来もまだまだ大丈夫と感じた次第です。

東北大学オープンキャンパス（7/28～29）に参加して — 「研究第一」にふれた実り多き2日間—

秋田県由利本荘市農業委員会事務局 主席主査 阿部 克人



写真1 10数年近く定期購読中の雑誌（フランス国立社会科学高等研究院発行「L' HOMME」、並びにヨーロッパ社会人類学会発行「Social Anthropology」）

7月、東北大学でオープンキャンパスが行われるとのことで、長男 崇央（中2）を連れ参加いたしました。長男はもともと岩石学や鉱物学に興味があり、はじめに28日午後から理学部地球科学系の教室を訪問しました。今まで見た事もないハイテク電子顕微鏡及びその解析画像に驚くとともに、現役大学院生による気迫のこもった解説や実験指導はとてわかりやすく、その真摯な研究姿勢にただただ感激したようです

明るく29日9時半過ぎ、ご挨拶をと東北アジア研究センターの懇話会事務局室に立ち寄りましてところ、センター内にも岩石学関連の研究者が数人いらっしゃることがわかり、急遽岩石火山学専攻の平野直人先生にお会いすることができました。国立科学博物館の話で盛り上がるなど、短時間ながら楽しいひとときでした。その後10時からは文学部ヨーロッパ史などの研究室を訪問しました。ゼミ室において高校生達が皆萎縮してしまっている中、歴史能力検定2級を目指している長男はナント勅令について先生に思い切って質問をし、親としてはハラハラものでしたが幸い、懇切丁寧な解説をいただき、いい経験だったなと思っております。研究第一の東北大学の気概に触れ、長男は益々勉学に励みたくなったようで、オープンキャンパスで得た刺激は実り多きものでした。

私にも似たような経験があります。秋田大学教育学部（農業専攻）在学中、社会教育主事資格取得を目指しておりました昭和58年5月、都内の武蔵大学で開催された日本展示学会研究大会において、当時会長で梅棹忠夫先生（本年7月ご逝去）にお会いしたことがきっかけで人類学に興味を持ち始めました。今は比較文明学会にも所属し細々と勉強してはおりますが（写真1）、学会会員ペーパー内容の1/2も理解するのがやっとです。時折地元郷土史研究会に寄稿したりするのが関の山ですが、引き続き人類学や外国語の学習を続ける所存です。「東北アジア学術交流懇話会」は、秋田にはない知的組織であります。秋田から仙台



写真3 銘菓いちじく羊羹のパッケージ

までは車で片道3時間程度かかりますが、機会をみて懇話会やセンター開催の勉強会を聴講していきたいものと考えております。

ところで、由利本荘市は秋田県南部に位置し（写真2）、日本海側鳥海山のふもとから日本海に至る県内随一の広さに、9万人が住まいしております。イチジク（写真3）の実質的な北限（経済栽培等一般的には新潟・宮城県といわれております。）であり意外とすしやすい地域です。皆さんぜひお越しください。



写真2 由利本荘市から早春の鳥海山北側の姿を望む（撮影 農業委員 相庭安一氏）

EDITOR'S NOTE
編集後記

今回は環日本海経済研究所特別研究員の前田奉司さんによるノボシビルスクでの国際イノベーションフォーラムの報告、当センターの塩谷昌史助教による日露学長会議（モスクワ）のレポート、そして秋田県由利本荘市農業委員会の阿部克人さんによる本学オープンキャンパス参加報告と、色とりどりの内容になりました。今後も、会員の皆様からのご寄稿を歓迎します。（石渡 明）

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第46号 2010年11月15日発行
 発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学東北アジア研究センター一気付
 PHONE 022-795-7580 FAX 022-795-6010
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/> E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp